ぎ堀内清顕と名を改めている。

共に、明治二十年ごろ歯科医術開業試験委員に任ぜられ、渡辺晋三は歯科医療倫理の確立に、堀内清顕は歯科材料の研究に、数々の貢献をしている。

幕末の口中科医あるいは口歯科医のその後については、今後の調査・研究にまちたい。（文中敬称略）

（京都市）

欽明朝に来日したイラン系の医師王有悛陀について

伊藤義教[1]
松木明知[2]

奈良朝に来日した李密醫は、「醫」の字が付されていることから、従来医師とされてきたが、「醫」は「翳」の誤りであり、これは中世ペルシャ語の Rāmyār の写音であり医師とは言えない。

日本書紀によれば、欽明天皇十四年（五五三）百済に対して医博士、易博士などの来日を要請したが、百済はこれに応えて翌十五年（五五四）二月易博士王道良、暦博士王保孫、医博士王有悛陀、採薬師潘量豎、丁有陀、楽人三斤以下四人が来日した。

この中に名前が中世ペルシャ語で解読出来るものがあり、医博士王有悛陀以下がそれである。

すなわち王有悛陀は中世ペルシャ語の Way-ayārid また

は Way-yārid の写音であって、「ワイによって助けられているもの」という意味の人名である。

「ワイ」とはアヴェスター語ワユ Vayu の転化したもので、風神、生の神、死の神、軍神など意味する。同様の名は中世ペルシャ語の文献にワタフラダート（王名）やワイボークト（神官名）として披見される。つまり「ワイ」を既存の「王」姓に充てたものである。

次の採薬師については、日本書紀の書記官が元来一名の人名を二分して二名の採薬師が来日した如く記載したのではないかと推察されるがその根拠を示す。

さらに楽人四人についてもイラン系の人である根拠を紹介する。

（1）京都大学・（2）弘前大学）

中川五郎治の種痘法の研究

――新しく発見された五郎治による被接種者――

松木明知

北方系の種痘法として知られる中川五郎治の種痘法については、これまで種々論じられて来たが、彼の種痘法は、彼によって接種された者がいたことで実証された。

種痘術の弟子白鳥雄蔵の例は除外しても、最年長者の田中いく女以下数名の者のみが知られているにすぎない。

この事実は明治十八年函館県衛生課の小貫庸徳が種痘の事跡、主として中川五郎治に関連して管内を実地に調査して発見したものであった。

今回筆者は、小貫庸徳の調査で判明した以外にもう二人被接種者がいたことを確認した。これは青森の菊池武文の調査になるもので、明治十五年当時青森県に在住していたが、元来は松前の人で、一人は七十歳の女性、一人は四十歳の男性であった。女性は上膊に、男性は上膊と内股に瘢